

黒瀬川水系河川整備基本方針

平成13年 1 月

富 山 県

黒瀬川水系河川整備基本方針（案）

目 次

第1章 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

第1節 流域の概要	1
1) 流域の概要	1
2) 治水事業の沿革と現状	1
3) 河川の利用と河川環境の現状	2
第2節 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	3
1) 河川整備の基本理念	3
2) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	3
(1) 洪水による被害の発生の防止又は軽減	3
(2) 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持	3
(3) 河川環境の整備と保全	3
第2章 河川の整備の基本となるべき事項	4
第1節 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項	4
第2節 主要な地点における計画高水流量に関する事項	4
第3節 主要な地点における計画高水位及び計画横断形の川幅に関する事項	5
第4節 主要な地点における 流水の正常な機能を維持するため必要な流量に関する事項	5

水系参考図

第1章 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

第1節 流域の概要

1) 流域の概要

黒瀬川水系は、その源を富山県黒部市南部の標高250～400mの丘陵地帯に発し、大谷川、神谷川等の支川を合わせ、黒部市石田地先において富山湾に注いでいる。

その流域は黒部市にあり、流域面積約19km²、幹川流路延長約11kmの二級水系で、我が国でも屈指の急流河川で知られる黒部川が形成した扇状地の南部に位置し、国道8号、北陸自動車道、J R北陸本線、富山地方鉄道がその中を南北に走っている。

国道8号より上流域は、大半が水田及び山地で占められており、下流域は用途地域に指定され市街地が形成されるなど、黒瀬川流域は、自然環境に優れるとともに、黒部市西部地方における社会、経済の基盤をなしていることから、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。

流域の気候は日本海側気候の特徴を示し、年平均降水量は約2,500mmで、梅雨期と秋期から冬期にかけて降水量が多い。特に6月上旬から10月中旬にかけて、梅雨前線及び台風や秋雨前線により大雨となることがある。冬期の降水は、降雪によるものである。年平均気温は約14℃となっている。

流域の地質は、平野部の表層部を沖積層が覆い、砂質土・粘性土が分布している。

2) 治水事業の沿革と現状

黒瀬川水系の主な洪水には、昭和44年(1969)8月の豪雨、昭和57年(1982)6月の豪雨、昭和60年(1983)7月の豪雨及び台風による洪水があり、床上・床下浸水、農地流失等の甚大な被害をもたらした。そのため、黒瀬川の治水事業は、河口(黒部市浜石田)における計画高水流量を230m³/sと定め、昭和54年(1979)から、築堤、掘削等を実施し、現在まで、河口から黒部市荒町地先(J R北陸本線鉄道橋)までの間の延長約2.3kmの整備を終えている。また、支川大谷川では、大谷ダムが、黒部市吉城寺地先に、昭和63年度(1988)建設着手し、平成10年度(1998)に完成した。

しかしながら、黒瀬川本川における中・上流部の流下能力は未だ小さく、水害が発生した地域についても未改修のままであることから、早期の治水安全度の向上が必要である。特に、中流部は流域の急激な都市化により、雨水の流出が増加しており、洪水に対して危険な状態にさらされる機会が多く、河川の整備状況はまだ十分な段階に達していない。

なお、黒瀬川において、記録に残る高潮被害は生じていない。

3) 河川の利用と河川環境の現状

黒瀬川の水利用は古くから行われており、現在でも黒部市の農地約600haのかんがい用水として広く利用されているほか、冬期における安全で円滑な交通の確保のための消雪用水としても利用されている。また、明治から大正にかけては、川舟を利用して肥料や石灰等が運搬されていた。

水質環境基準類型指定は、A類型に指定されており、環境基準点（石田橋）で基準値を達成している。

上流域は、立山連峰の雄大な山並みを背景として、水田・集落の中を流れるのどかな田園風景を呈し、豊かな自然環境と良好な河川景観を有している。

中・下流域は、黒部川扇状地の南側辺縁部の市街地を流れ、水際には寄洲が形成されヨシ群落が発達し、アユやウグイのほか貴重な淡水魚であるトミヨ、カマキリ（アユカケ）が生息し、カモ等が群をなす姿も見られる。近年は、区画整理事業の実施など急激な都市化が進行している。

河口部には、ウグイ等の魚類が多く生息するほか、セグロカモメ、アオサギ等の鳥類が群をなす姿もみられる。また、黒瀬川の左右岸には、石田フィッシャリーナや石田浜海水浴場、大島キャンプ場が整備されており、県内有数の海洋レクリエーションエリアとなっている。

このような背景のもと、黒瀬川では、流域の豊かな自然環境や、アユ、トミヨ、カマキリ（アユカケ）など多様な生物の生息・生育環境の保全を行うことが望まれている。また、中流部においては、舟運の歴史を後世に伝えるとともに、市街地の開発にともない利用者の増加が予想されるため、人々が水辺に親しみやすい水辺空間の確保が求められている。

第2節 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

1) 河川整備の基本理念

黒瀬川水系における今後の河川整備の理念は、河川の現状や水害発生状況及び河川の利用と河川環境の現状を踏まえ、地域社会、経済情勢の発展に即応するよう関連する計画との整合を図り、

「治水」・・・住民の生命・財産を洪水から守る。

「利水」・・・河川の機能を維持し、安定した水利用を図るよう努める。

「河川環境」・・・うるおいと安らぎのある水辺環境を整備する。

とのバランスをとって、水源から河口まで一貫した計画のもとに整備を図っていくものとする。

2) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

黒瀬川の総合的な保全と利用に関する基本方針は、河川整備の3つの基本理念を踏まえ、河川の現状、水害発生状況及び河川の利用と河川環境の現状を考慮し、次のとおりとした。

(1) 洪水による被害の発生防止又は軽減

黒瀬川水系では、流域内の社会・経済的な重要度と県内他河川との計画規模の整合、昭和44年(1969)8月豪雨による洪水等の既往洪水を踏まえ、50年に1回程度発生する規模の洪水を安全に流下させることを目標とする。

さらに、関係機関や地域住民と連携して、災害情報伝達体制及び警戒避難体制の整備等水防体制の強化を図るなど総合的な被害軽減対策を推進する。

(2) 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持

黒瀬川の河川水は、沿川の水田のかんがい利用されているほか、冬期の消雪用水としても利用されている。これらの水利用や動植物の生息地または生育地の状況等に配慮しながら、合理的な水利用を図り、流水の正常な機能の維持に努めるものとする。

(3) 河川環境の整備と保全

黒瀬川は、豊かな川の流れに育まれてきた多様な生物がみられることから、そこに生息・生育する生物に配慮した川づくり、また、身近な川から自然を学ぶ学習の場としての活用を図るなど、人の生活と調和のとれた水辺空間の整備と保全を図る。

また、河川に関する情報を地域住民に幅広く提供することにより、河川と地域住民との連携を積極的に図り、河川への親しみを醸成し、地域住民とともに河川の良い維持と潤いのある水辺空間の形成を図る。

第2章 河川の整備の基本となるべき事項

第1節 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項

基本高水は、昭和44年(1969)8月豪雨による洪水等の既往洪水を踏まえ、50年に1回程度発生する規模の洪水とする。また、そのピーク流量は、基準地点石田橋において $230\text{m}^3/\text{s}$ とし、これを河道へ配分する。

基本高水のピーク流量等一覧表

単位： m^3/s

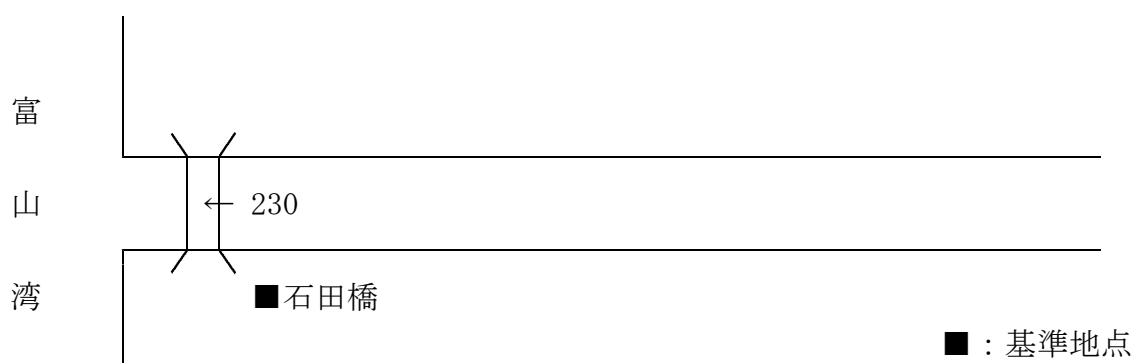
河川名	基準地点名	基本高水のピーク流量	河道への配分流量
黒瀬川	石田橋	230	230

第2節 主要な地点における計画高水流量に関する事項

計画高水流量は、石田橋において $230\text{m}^3/\text{s}$ とする。

計画高水流量図

単位： m^3/s



第3節 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項

黒瀬川水系の主要な地点における計画高水位及び河道の計画横断形に係る概ねの川幅は、次のとおりとする。

主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅一覧表

河川名	地点名	河口からの距離 (km)	計画高水位 (T.P. :m)	川幅 (m)	摘要
黒瀬川	石田橋	0.75	+1.73	36	基準地点

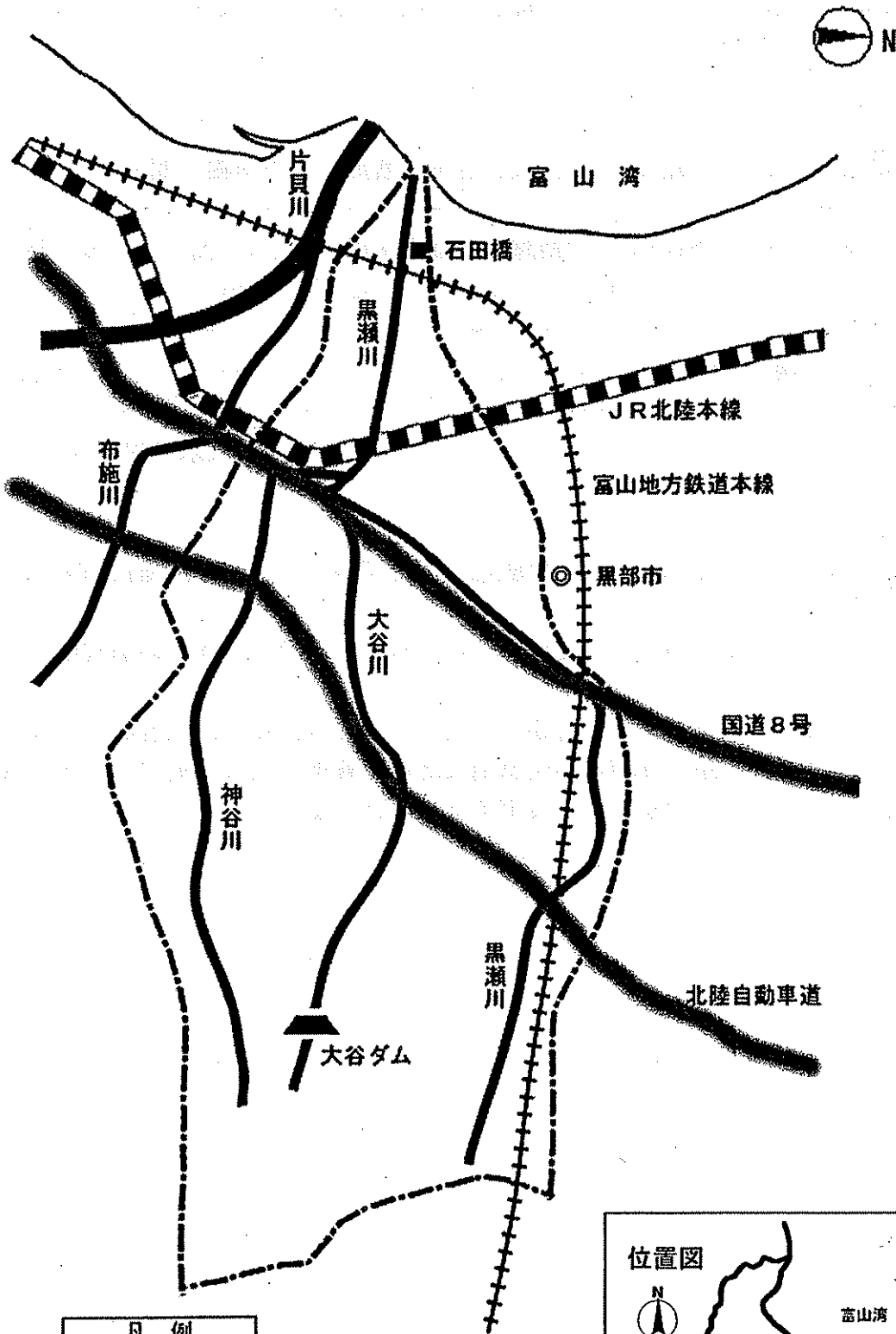
T.P. : 東京湾中等潮位

第4節 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量に関する事項

黒瀬川の水は、かんがい用水として広く利用されているほか、冬期の消雪用水としても利用されている。

流水の正常な機能を維持するため必要な流量については、今後、流況等の把握に努めるとともに、流水の占用、動植物の生息地または生育地の状況、流水の清潔の保持等に十分配慮し、調査・検討を行い、設定するものとする。

黒瀬川水系参考図



凡例	
	流域界
	基準地点

縮尺: 1:50000

